

日 時

2月20日(土)

開始 13:00
終了 15:30

講師

岩田昌征

千葉大学名誉教授

【参考資料】

●「党社会主義体制崩壊の意味(上) ポーランド・ユーゴスラヴィアの具体例に即して」(『思想運動』2020年6月1日 第1053号付録・通巻15号)

●「党社会主義体制崩壊の意味(下) ポーランド・ユーゴスラヴィアの具体例に即して」(『思想運動』2020年7月1日 第1054号付録・通巻16号)

●<『人新世の「資本論」の脱成長コミュニティ論への個人的感想>(サイト「ちきゅう座」2020年12月27日)

ソ連邦崩壊30年の今年、ふたたび社会主義について考える

斎藤幸平著『人新世の「資本論」』(集英社新書、2020年・令和2年)、特にその第6章「欠乏の資本主義、潤沢なコミュニズムと第7章「脱成長コミュニズムが世界を救う」に描写されている社会経済システムは、旧ユーゴスラヴィア共産主義者同盟が1970年代に実験した自主管理連合(アソシエーション)労働体制にほぼ重なる。しかしながら、決定的な相違が両者間にある。それは、旧ユーゴスラヴィアのコミュニストは、この体制を促成の社会主義としてデザインしていたことだ。脱促差を自覚しておれば、本書がかなり話題になっている事実は、旧ユーゴスラヴィアの実験が歴史的に無意味でなかったことを示している。

かつて、私は『経済学辞典 第3版』(岩波書店、1992年・平成4年)に「労働者自主管理」の項目を書いて、そこに「将来、再資本主義化の行きついたところで、自主管理社会主義の40年間の貴重な歴史的経験として再評価できるであろう。」と期待していた。それが脱成長志向の姿で現れてこようとは! 勿論、ユーゴスラヴィアのユの字も登場しないが。

私が東西対抗時代の資本主義、ソ連型社会主義、ユーゴスラヴィア型社会主義の現実から抽象したトリアーデ体系表、1980年初に成立した体系表に帰って、経済社会のあり得べき形を考えたい。まずは、所有制の本源的働き、その三類型である私有制、公有制、共有制の性格を論ずる。次いで、経済調整様式の三類型である点調整(市場)、線調整(計画)、面調整(協議)を説明する。経済社会は、三類型の節合・組合せが時代の民衆の有する生活・欲望の質・量と生産力・技術の質・量に合致する場合に停滞せず、暴走せずに済む。今日、私有制と市場の過剰が経済社会の暴走を極限化し、地球の許容量に衝突している。

最後に、今日的话题の日本学術会議問題において、民衆世界が知識人研究者の主張に共鳴して来ない原因を経済調整様式の次元で説明する。

日 時

2月24日(水)

開始 18:30
終了 21:00

講師

立野正裕

元明治大学教員

横光利一「春は馬車に乗って」

(『日輪／春は馬車に乗って 他八篇』岩波文庫収録)

日本ファシズムの激化してゆく時代、戦争に突入してゆく時代、文学者たちはどのように時代および現実と向き合ったのか。そのまなざし、その精神のうちそとを、当時を代表する四人の作家それぞれの秀作をとおして見つめなおす。

(開始時間は各回とも午後6時30分)

日 時

2月27日(土)

開始 13:00
終了 15:30

報告

山口直孝

二松学舎大学教員

インターナショナルイズムの復権

—「コンプレックス脱却の当為」(1997年)

一年余にわたるHOWS連続講座「大西巨人『神聖喜劇』を読む」は終了した。参加者はさまざまなことを学んだ。本講座では、『神聖喜劇』講座で学んだことを、日本の敗戦後から1990年代後半までに書かれた大西の批評文を読むことでさらに深めていきたい。それは現在われわれが直面している問題を解く手がかりとなるだろう。